

『ティファニーで朝食を』

トルーマン・カポーティ 著 村上春樹 訳 新潮文庫 693円(税込)

自由とはなにか—古典文学に学ぶ

会員 山崎 岳人 (64期)



数年前のことだ。よく行く本屋で平積みされている文庫本を眺めていると、明るいティファニーブルーが目に入った。そこには『ティファニーで朝食を トルーマン・カポーティ 村上春樹訳』と銀色の文字で書かれていた。その鮮やかな装丁*1に惹かれて、僕は思わず本を手にとった。

作者のトルーマン・カポーティは、1924年生まれのアメリカの小説家である。彼にとって、この小説はキャリアの分岐点となる重要なものであったようだ。半日ほどで全部読める中編小説だ。

翻訳した村上春樹氏は世界的に有名な小説家で、英文学の翻訳も多く手掛けている。最近のインタビューでは「なぜ僕が翻訳を好きかという、親切さを出せるから」と語っている(2021年6月26日日経電子版)。この翻訳もわかりやすい日本語で書かれていて、彼の親切心が感じられる。

物語の舞台は1940年代のニューヨークで、世界中で悲惨な戦争が行われていた頃の話だ。主人公は、物語の語り手である「僕」という一人称で呼ばれる作家志望の青年だ。ただ、本当の主人公はホリー・ゴライトリールという女性だろう。作中で明らかにされているわけではないが、年齢は20歳前後の設定だ。読者は「僕」の語りを通じて、カポーティが生み出した魅力あるキャラクターを知ることになる。

有名な映画版の主人公はオードリー・ヘップバーンが演じるホリーで、「僕」との青春恋愛ストーリーが描かれている。多くの人は、こちらのイメージが強いはずだ。

一方で、小説は純粋な恋愛ものではない。小説の中のホリーは、もっと独立心の強い人で、野良猫のような

自由奔放さと愛くるしさを持っている。そこにはヘップバーンが持つ清純なイメージはない。

二人の出会いのきっかけは、「僕」がホリーの住むアパートメントに引っ越してきたことだ。その頃、彼女はニューヨークの社交界で浮名を流して、貧乏な「僕」には高嶺の花のような存在であった。ここからストーリーは始まる。

題名の「ティファニーで朝食を」(英語ではBreakfast at Tiffany's)は架空の設定である。今では、ニューヨークの五番街にあるティファニー本店にはBlue Box Cafe(ブルーボックスカフェ)というカフェがあるが、オープンしたのは2017年11月である。つまり、1940年代のティファニーでは、朝食はおろか、食事をするさえできなかったのだ。

なのに、ホリーは「いつの日か目覚めて、ティファニーで朝ごはんを食べるときにも、この自分のままでいたい」(63頁*2)と夢想し、「ティファニーの店内にいるみたいな気持ちにさせてくれる場所」(66頁)を追い求めている。彼女にとってその場所は恋人の横である必要はない。自然に自分らしくいられる“どこか”だ。

彼女が“ティファニーのような場所”を見つけられたかどうかは、小説を読んで確認していただきたい。カポーティが生んだこのストーリーを気に入った方は「野生の生き物にいったん心を注いだら、あなたは空を見上げて人生を送ることになる」(116頁)というホリーの言葉に納得するはずだ。

末筆になるが、この本に関する最高の書評は、村上春樹氏の「訳者あとがき」である。ぜひこちらも合わせて読んでいただきたい。

*1: 期間限定の特別な装丁だったようで、現在ではこの装丁の新潮文庫版は販売されていない。

*2: 本文中の引用箇所のパージ数は平成20年12月1日発行・平成29年4月30日七刷の新潮文庫版によった。